

真理と芸術を万人に —岩波茂雄 読書子に寄す—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

創刊90周年を迎えた岩波文庫は岩波茂雄（1881-1946）の予想を遥かに超える反響と共に誕生した。生前最後の談話を筆記した『回顧三十年』によると「何百通という感謝状、激励文が未知の読者から寄せられ、中には『わが一生の教養を岩波文庫に託す』というような言葉すらあり、私は初めて『本屋になってよかった』との感を深くした」という。学生は岩波文庫を懐に入れて街を闊歩し、兵士は荷物の底に忍ばせて戦地に赴くという社会現象を引き起こした。

岩波文庫が熱烈に支持されたのは文学、哲学、社会科学、自然科学の不朽の名著を手頃なサイズと価格で市井に送り出したからだ。思想・信条・主義にかかわらず万人が必読すべき古典的価値のある書物を公平・公正に出版するというのが岩波の一貫した姿勢だった。

だが日中戦争が勃発して軍国主義が台頭すると言論の自由は剥奪され、岩波が創業した岩波書店の出版物も格好の標的となった。天変地異や社会情勢に翻弄されて企業の存続が脅かされることは少なくない。岩波も関東大震災に遭遇し、商売上の資産の大半を失い、戦時下の異常な言論弾圧と格闘した。一世を風靡した出版界の寵児はいかにして逆風の時代を生き抜いたのか。

少年の志と青年の挫折

岩波は長野県諏訪郡中州村、現在の諏訪市中州



岩波茂雄

で中流農家の長男として生まれた。高等小学校のとき交友会をつくって会長におさまり、級友たちと天下国家を論じるなど早熟な子供だった。

明治維新の英雄たちに憧れ、五箇条の御誓文の「広く会議を興し万機公論に決すべし」の一節を好

み、同郷の佐久間象山の和魂洋才の教えに共鳴する。もっとも心酔したのは西郷隆盛で敬天愛人の遺訓に感激し、旧制諏訪実科中学に進むと西郷の墓参りのために船に乗って鹿児島まで旅した。

中学2年16歳のとき村役場の助役をしていた父が病死し、親戚一同は岩波家の総領息子として農業を継ぐように意見する。しかし進学への夢は断ちがたく、最大の理解者である母うたが学資を工面して郷里から逃げるように上京した。

師事していた国粹主義の教育者・杉浦重剛を頼って自由な校風の旧制日本中学へ転入し、卒業後第一高等学校を受験して失敗。翌年ふたたび挑戦して合格する。

一高では同級の藤村操が日光の華嚴の滝で投身自殺し、哲学的な遺書に衝撃を受けた。勉強が手につかずトルストイの『わが懺悔』を読んで信仰に目覚め、長野の野尻湖の小島に引きこもった。風雨の烈しい夜半、心配した母が訪ねてきて復学したものの2年つづけて落第し、ついに除籍処分

となる。とはいえ友人には恵まれ、のちに学習院の院長や文部大臣を務める安倍能成を筆頭に夏目漱石の門下生の阿部次郎らと親交を深めた。後年、彼らは岩波の出版事業の協力者となる。

古本屋から新生活を開拓

母を安心させるために岩波は東京帝国大学哲学科の選科に入った。旧制高校を卒業しないと本科生にはなれず、いわば補欠のような身分だった。

卒業後、神田女学校の教師となって女子教育に情熱を注ぐ。しかし学校当局の方針と折りあわず4年ほどで退職した。

心機一転して独立独歩の商売を始めようと思いつき、資本も少なくても済む古本屋に眼をつけた。大正2年（1913）、神田神保町の一隅に岩波書店を開業する。

当時の古本屋は客との駆け引きで値段を決めていた。岩波は「書物が文化財であるからにはその取引も公明正大にすべきである」と古本に正札をつけて異例の定価販売を始めた。当初はトラブルが絶えなかったものの「他より幾分でも高く買入れ、また幾分でも他より安く売る」という愚直な姿勢が徐々に評価され、古本屋は信用できないという旧来のイメージを一新した。

商売が軌道に乗ると新たに出版業への転身を企てた。記念すべき処女出版は夏目漱石の『ころ』と決め、安倍能成の紹介で漱石に頼み込むと快く承諾し、店の看板の文字まで書いてくれた。

勢いのついた岩波は西田幾多郎らの編集による哲学叢書、寺田寅彦の監修による科学叢書、夏目漱石全集などを相次いで刊行し、回を重ねるごとに売り上げを伸ばしていった。ところが思いがけない事態で一挙に明暗が反転する。

大正12年（1923）9月1日に襲来した関東大震災で事務所、倉庫、印刷所などを焼失した。岩波書店は再起不能と噂されたものの、岩波は気にしなかった。社員とその家族が無事であったことを知ると驚喜し、復興への決意を燃えさせた。当時を回想して「負傷者がいなかったこと、罹災することで試練を与えられたこと、新生活を開拓する勇氣と確信と喜びを与えられたことに感謝し

た」と語っている。

困難な日々が来るたびに

起死回生の決定打となった岩波文庫は予約販売による高価な全集ブームに対抗して発案された。創刊の辞となる昭和2年（1927）の「読書子に寄す」は「真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む」と格調高く切り出し、読書子＝読者に対して「今や知識と美を特権階級の独占より奪い返すことは常に進取的なる民衆の切実な要求である」「生命ある不朽の書を少数者の書齋と研究室より解放して街頭にくまなく立たしめ民衆に伍せしめるであろう」と宣言した。

公正な立場による出版を己の使命と考えていた岩波は「『吉田松陰全集』を出す心持ちとマルクスの『資本論』を出すことにおいて、出版者としての小生の態度は一貫せる操守のもとに出ずる」と書簡に記した。そして軍部による言論統制の風潮に「諸種の学説あり、諸種の思想あり、これを検討論議してこそ學術も社会も進歩する」「故に一の主義を奉ずるものも他の反対の主義を持つものに対して尊敬を以て接し、堂々公明なる心持ちを以て論議すべき」と警鐘を鳴らしている。

昭和15年（1940）、歴史学者の津田左右吉が約20年前に刊行した『古事記及び日本書紀の研究』など四つの著作が建国神話を批判し、不敬罪にあたるとして発禁処分となった。出版元の岩波と共に出版法違反で起訴され、早稲田大学教授の津田は辞職に追い込まれた。岩波は収監されることも想定して身体を鍛えていたという。一審は有罪、二審で時効が判明し、最終的に免訴で決着する。

終戦間際の昭和20年（1945）、岩波の娘婿である小林勇も治安維持法で逮捕された。岩波書店の刊行物の著者たちは戦後、岩波文化人と呼ばれるようになり、進歩派知識人の牙城と見做された。ただ愛国者を自認する岩波は言論・出版・表現の自由を守り抜くことが「日本国民を大国民にする」と信じて疑わなかった。

逆境に直面すると「困難が来るたびに僕は元気になるよ」といつも明るく振る舞った。